

『源氏物語』紅葉賀巻における「仏の御迦陵頻伽の
声」について -仏の相好に着目して-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2023-09-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小滝,真弓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/0002000109

『源氏物語』紅葉賀巻における

「仏の御迦陵頻伽の声」について

— 仏の相好に着目して —

Consideration about “Voice of the
Karyobinga of the Buddha” in the
Momjinoga Part of the Tale of Genji

— From the Perspective of the
Lakkhana of a Buddha —

博士後期課程 日本文学専攻 二〇一六年度入学

小 滝 真 弓

KOTAKI Mayumi

【論文要旨】

本論文では紅葉賀巻に見える、「仏の御迦陵頻伽の声」という表現に着目し、その意味と位相について検討した。従来の研究において、当該

箇所は主に美的表現の一つとして捉えられ、仏典に見える「迦陵頻伽声」の特質には、殆ど目が向けられてこなかった。

さらに近年、「仏の御」と「迦陵頻伽の声」で分けて解釈すべきだとする新説が提起されたが、その論拠となった『山下水』の言説には、未だ不明な点が多く残されている。そこで本論では、『山下水』の仏典解釈を明らかにしたうえで、仏教文献の記述を中心に、仏の相好としての「迦陵頻伽声」を取り上げた。仏の梵音声は、「龍王」や「緊那羅」など、迦陵頻伽以外にも様々な声に喩えられている。その中で「迦陵頻伽声」が選ばれた理由について考察し、その声が有する特質に言及した。

上記を踏まえ、「仏の御迦陵頻伽の声」をめぐる、光源氏と仏伝の位相差に着目し、その陰影について論じた。紅葉賀巻の試楽では、濁世に突如現れ、光明と梵音声をもって衆生を導く、仏の如き光源氏の超越性が示されている。しかしむしろその聖性によって、かえって源氏と藤壺の二人が犯した、救済され得ぬ罪が照らし出されると結論付けた。

【キーワード】紅葉賀巻、迦陵頻伽声、相好、梵音声、仏伝

1・せつぷり

『源氏物語』紅葉賀巻には、華麗を極める試楽の日を舞台にして、他を圧倒する光源氏の詠の声が次のように称揚されている。

朱雀院の行幸は神無月の十日あまりなり。(中略) 上も、藤壺の見たまはさらむをあかず思さるれば、試楽を御前にてせさせたまふ。

(中略) 入り方の日影さやかにさしたるに、楽の声まさり、もののおもしろきほどに、同じ舞の足踏面持、世に見えぬさまなり。詠などしたまへるは、これや仏の御迦陵頻伽の声ならむと聞こゆ。(紅葉賀卷／三一頁)

注目したいのは、傍線部の「仏の御迦陵頻伽の声」という表現だ。従来の研究では、当該箇所を「仏の、御迦陵頻伽の声」と捉え、「仏の」の「の」を所有格と解し、「御仏の迦陵頻伽のお声¹」や、「仏の御国の迦陵頻伽のお声²」と包括的に訳している。しかし近年、当該箇所について「仏の御、迦陵頻伽の声」と、「仏の御」で文意を区切り直し、並列的に解すべきだとする新見が、田口暢之氏³により呈された。この新説は岡田貴憲氏⁴に批判的に継承されたが、今西祐一郎氏⁵の再検討を経て、「仏の御、迦陵頻伽の声」と文意を分割して解するのではなく、「仏の、御迦陵頻伽の声」と、包括的に文意を解する従来説の立場が妥当であると結論付けられた。またこれらの議論が、大島本の「仏の御・迦陵頻伽の声」という朱点の存在に依拠し、『山水』の注釈を援用して展開されている点に着目した金子英和氏⁶は、改めて『山水』の仏典引用について論じ、『山水』の仏典の解釈には問題があり、田口氏や岡田氏の唱えた新説の論拠とはなり得ないと述べている。

こうした先学諸氏の意欲的な試みに学ぶところは大きいものの、本稿の立場としては、当該箇所の解釈にはより慎重な議論を期したい。私見を述べると、「仏の御」で文意を区切るか否かというのはあくまで副次的な議論であり、そもそも当該箇所を読み解くうえで不可欠な仏教文献の記述に、広く目を向ける必要があると考えている。当該箇所の意味を

明らかにするためには、仏典の文脈をどのように本文の読みに反映するかが重要となるためだ。しかし従来説では、当該箇所の参考となる仏典や文献が示されておらず、迦陵頻伽とは極楽の鳥で、その鳴き声は仏の説法の妙音に譬えられる、といった指摘に留まっている⁷。新説もまた、自説の論拠となり得る『山水』の記述を部分的に引用する一方で、その記述が如何なる仏典や文献を元とし、その内容をどういう形で『源氏物語』と絡めて解しているのかについては言及していない。これは、『山水』の注は本当に仏典を誤読しているのかという問題とも絡みあう。そこで本稿では、先行説を確認したうえで、『山水』の解釈を再検討し、仏典の記述を軸に、「仏の御迦陵頻伽の声」の位相について明らかにする。特に仏菩薩の相好に関わる言説に着目し、仏伝を中心に、「仏の御迦陵頻伽の声」という表現を通して生じた物語の陰影について論じていく。

二、先行説の見解と問題点

本論に移る前に、先学の見解と残された課題について、今少し詳しく確認しておこう。先に述べた通り、紅葉賀卷の「仏の御迦陵頻伽の声」という箇所について、現行の注釈書の多くは、迦陵頻伽は極楽にいる鳥であり、その鳴き声が仏の説法の妙音に譬えられたことから生じた表現だと述べている。また『日本古典文学全集』や『新編日本古典文学全集』は、仏国土(極楽浄土)に住む迦陵頻伽の声と解しているが、内容を鑑みるに、これらはいずれも次に引用する『阿弥陀経』の言説に依拠した解釈と考えられる。

爾時佛告長老舍利弗。從是西方過十萬億佛土。有世界名曰

極樂。其土有佛號阿彌陀。今現在說法。(中略)彼國常有種種
奇妙雜色之鳥。白鶴孔雀鸚鵡舍利迦陵頻伽共命之鳥。是諸衆鳥。
晝夜六時出和雅音。其音演暢五根五力七菩提分八聖道分如是等
法。其土衆生聞是音已。皆悉念佛法念僧。舍利弗。汝勿
謂此鳥實是罪報所生。所以者何。彼佛國土無三惡趣。舍利弗。
其佛國土尚無三惡道之名。何況有實。是諸衆鳥。皆是阿彌陀佛。
欲令法音宣流變化所作。(二卷／三四六頁下段／三四七頁上
段)

右は極樂浄土の世界について、釈迦が舍利弗に語った場面だ。それに
よれば、極樂には迦陵頻伽など種々の靈鳥(浄土六鳥)が住み、一日に
六度、得も言われぬ美しい音声で鳴き、その声は五根・五力・七菩提
分¹⁰・八聖道分¹¹といった仏の教えとして衆生に聞こえ、三宝を念じ
る気持ちを生じさせるという。『阿弥陀経』は続けて、これら浄土六鳥
は罪により三惡道に墮ちたのではなく、全て阿弥陀仏が佛法を説くため
に変化した姿だと説いている。たしかにこれも仏に由来する音声ではあ
る。しかし仏の声が「迦陵頻伽の声」だというのではなく、極樂では迦
陵頻伽を含む「諸衆鳥」の鳴き声が、阿弥陀仏が説く法の妙音と化す点
に主眼が置かれていることに注意したい。端的に述べれば、『阿弥陀経』
に依拠した解釈では、いかに文法上の機能を論じたところで、当該箇所
の文意が通じないのである。

そのうえで新見に目を向けると、実は「仏の御」とそれ以下の「迦陵
頻伽の声」を分割した解釈自体は、田口暢之氏¹²の論考以前にも呈さ
れている。光源氏が早くから仏菩薩に準えられていることに着目した阿

部秋生氏¹³は、紅葉賀巻の表現を踏まえ、「詠をする源氏の声は仏の御
声・迦陵頻伽の極樂世界になく声であるといい」と解した。これは奇し
くも、「御」を「御(声)」の意で取るべきだとし、「これが仏の御(声)、
迦陵頻伽の声であろうかと聞こえる」と当該箇所を訳した田口氏の見解
と重なり合う。

田口氏の論考で肝要なのは、当該箇所が従来の研究において曖昧かつ
恣意的に訳されてきたという問題に光を当て、本文の語順を活かした解
釈を確立しようと試みたことだ。ただし、その論考の鍵となった『山下
水』(室町末期成立／三条西実枝)の読み解きには、いささか疑問が残る。
田口氏は鳳凰や朱雀といった靈鳥の名に「御」を付けた例が無いことや、
次に挙げる『山水』の注でも、「仏の御」と分割して読み、源氏の声
を如来の声と捉えていると述べ、先ほどの見解を示した。

箋曰仏ノ御迦陵頻伽ノ声ト云ヘル尤可付眼也 此鳥ノ声雖無^三可比
之物^二仏ノ音声ニハ不及也 随喜功德品ノハ鳥ノウヘ斗也 化城
喻品ノ聖主天中天ノ文此所ニ能叶ヘリ 仏ノ滅度ノ後如来ノ御声聞
タル人ハアルマシキカカヤウニコソト思ヤル計源氏ノ音声ノ勝レタ
ルト云也

おそらく田口氏は、波線部の「如来ノ御声」という箇所から、『山水』
も「仏の御」で区切って読んだと考えたのであろう。しかし、その前に
ある「化城喻品ノ聖主天中天ノ文此所ニ能叶ヘリ」という実枝の見解に
着目すれば、『山水』が「仏の御」で区切って読んでいないことは明
らかである。田口氏は言及していないが、その偈の続きは、「迦陵頻伽
の声でもって衆生を哀れみ慈しむ方(大通智勝如来)に、我らは今恭敬

礼拝する（聖主天中王 迦陵頻伽聲 哀啓衆生者 我等今敬禮）」というものだ¹⁴。「仏の御迦陵頻伽の声」という文が、この化城喩品の一節に「能叶へり」と実枝は評しているのであるから、少なくとも『山下水』を論拠に、「仏の御」で区切って読むことは難しい。

また岡田貴憲氏¹⁵は、同じく『山下水』の記述（傍線部）を論拠に、「源氏の声を仏の声に準えたならば、それに劣る迦陵頻伽の声を持ち出す必要はない」とし、田口氏の見解に疑義を唱えた。岡田氏は当時青海波の詠が優れた詩句として認識されていたことを指摘し、「詠の詩句そのもの」を「仏の御（経）」に、詠じる光源氏の声を「迦陵頻伽の声」にそれぞれ準えたのがこの一節であり、優れた製作物（経）が美声（迦陵頻伽の声）で奏でられる対比関係に、この一文の要諦があると述べている。ただし管見の限りでは、作品の成立年代を問わず、優れた製作物を「御経」と表現した例は確認できない¹⁶。

両者の説が投げかけた問いに対して、今西祐一郎氏¹⁷は『源氏物語』に見える「御」の敬語機能について分析し、「仏の御」で分けて、包括的に読む従来説の解釈が正しいと結論付けた。しかし今西氏は、「迦陵頻伽」という語もまた仏典由来の語であるからなのだろうか、「迦陵頻伽の声」全体を包括的に敬意の対象として、その全体に「御」を付したのである¹⁸と述べており、なぜ物語が「仏の御迦陵頻伽の声」と記したのかについては言及していない。今西氏の指摘により、文法上の問題は解決されたものの、「迦陵頻伽の声」とは何なのか、なぜ「仏の」という尊格が上接しているのかという根本的な問題については、未だ考察の余地が残されている。

ここまでの論考が、主に文法上の問題から「御」をどう解釈するかに焦点を当てたのに対し、田口氏・岡田氏が論考の鍵とした『山下水』の仏典解釈を批判したのが金子英和氏¹⁹である。金子氏は『往生要集』の記述などを踏まえ、仏の声を迦陵頻伽の声に準えることは珍しくなかったと指摘し、迦陵頻伽の声が仏の声に劣るという『山下水』の記述は根拠が無く、仏典を誤読しているとした。さらに化城喩品に見える大通智勝如来の逸話を引きながら、釈迦入滅を思わせる記述を続ける『山下水』の解釈では、光源氏が「この二尊に同時に重ねられている」ため矛盾をきたすと述べている。金子氏は、『山下水』が引用した仏典の内容や文脈について詳述していないが、『山下水』が仏典を誤読しているか否かを判るのであれば、まず典拠として引かれた仏典の文脈に照らし合わせた読み解きが必要とされよう。

三、「山下水」の仏典引用について

そこで考えねばならないのが、先学諸氏が自説の論拠とし、あるいは問題のある仏典解釈とした『山下水』の言説だ。田口氏や岡田氏が引用したのは、実枝自身の見解である「箋曰」以下の部分に限られるため、改めて全体の内容を確認しておきたい。

化城喩品ニ聖主天中天迦陵頻伽声哀啓衆生者我等今敬礼 随喜功德
品山川險谷中迦陵頻伽声命、等諸鳥悉聞其音声

迦陵頻事

名義集ニ此云 妙声鳥ト 大論云在穀中未出发声微妙勝於諸鳥

王法念経云出妙音声美音若天若人若緊那羅等無能及者唯除如来音声

可唐 教鳥此鳥鳴時音中轉苦空無我常樂我淨

箋曰仏ノ御迦陵頻迦ノ声ト云ヘル尤可付眼也 此鳥ノ声雖無ト可比之物ニ 仏ノ音声ニハ不及也 随喜功德品ノハ鳥ノウヘ斗也 化城喩品ノ聖主天中天ノ文此所ニ能叶ヘリ 仏ノ滅度ノ後如来ノ御声聞タル人ハアルマシキカかやうニコソト思ヤル計源氏ノ音声ノ勝レタルト云也

筆頭として挙げられている『法華経』化城喩品の偈は、『河海抄』以降古注釈で指摘されてきた箇所だ²⁰。しかし後に続く随喜功德品(正しくは法師功德品)の偈は、他の古注釈には無い『山下水』独自の注である。また「迦陵頻事」以下の記述は、実枝の父・三条西公条が著した『明星抄』を引いているが、そこに再び「可」として『河海抄』からの引用が含まれており、いささか複雑な構成となっている²¹。上記を踏まえたくえで、『山下水』の注の趣旨を大別すると、①「迦陵頻伽声」に関する法華経の記述、②『明星抄』所引の注、③実枝の私見に分けられる。①と③の内容は合わせて後述するため、まず②『明星抄』所引の文献を整理しておこう。『明星抄』の注は迦陵頻伽の鳴き声に着目しており、『翻訳名義集』二に載る迦陵頻伽の別称(好声鳥)、『大智度論』初品中欲住六神通釋論第四三に見える、迦陵頻伽の声が卵殻の中でも諸鳥に勝るといふ記述、『正法念処經』卷六八の、如来を除き迦陵頻伽の美声に及ぶ者は無いと説いた箇所を挙げている。最後の『河海抄』からの引用のみ出典が記されていないが、おそらく三大乗書の一つ『教訓抄』(二二三三年成立/狛近真著)の卷四「迦陵頻」の項に拠った記述である。

漢云「教鳥」。此鳥鳴音中。轉苦空無我常樂我淨也。(第一九輯上

／管弦部)

右の引用は、迦陵頻伽は漢では教鳥と言われており、「苦空無我常樂我淨」と轉るといふ意だ。これは『涅槃経』などに見える「四徳涅槃²²」の教えを説いたものである。迦陵頻伽が「苦空無我常樂我淨」と轉るといふ言説は仏典には見えないものの、『阿弥陀經』の迦陵頻伽が妙音でもって法を説くという思想に、大乘仏教の真髓でもある四徳涅槃の思想を組み合わせたのが、この『教訓抄』の記述と考えられる²³。

もともと、実枝の仏典解釈を示す③「箋曰」以下の内容に関わるのは、①の法華経に関する箇所だ。たしかに『山下水』は、本来「法師功德品」にある記述の出典を「随喜功德品」と誤記している。ただし「鳥ノウヘ斗也」の文意は、金子氏が言うように「迦陵頻伽が諸鳥に勝る声をしていふ」と実枝が誤読しているのではなく、あくまで「諸鳥」の声の一つとして記されているという程度の意味であろう。参考までに、「法師功德品」の該当部分を引いておく。

若善男子善女人。受持此經。若讀若誦若解說若書寫。得三千二百耳功德。以是清淨耳。聞三千大千世界。(中略)

父母所生耳 清淨無濁穢 以是此常耳聞三千世界聲(中略)
山川嶮谷中 迦陵頻伽聲 命命等諸鳥 悉聞其音聲 地獄衆苦痛 種種楚毒聲(後略)(九卷/四七頁下段~四八頁上段)

右は法華経を受持し、読誦書寫した者は、千二百の耳の功德(耳根功德)を得ると説いた箇所だ。その「清淨耳」でもって、下は阿鼻地獄から上は有頂天まで、三千世界のあらゆる音声を聞くことが出来るとされた。傍線部は山川や險谷の中にいる迦陵頻伽の声や、命命鳥など諸鳥の

声を悉く聞くと述べた箇所である。『山水』が続けて、「化城喩品ノ聖主天中天ノ文此所ニ能叶ヘリ」としているのは、「法師功德品」はあくまで「諸鳥」の声であるが、「化城喩品」では大通智勝如来の声を「迦陵頻伽声」と記しているため、紅葉賀巻の文脈に「能叶ヘリ」というのである。

爾時諸梵天王。即於佛前一心同聲。以偈頌曰

聖主天中王 迦陵頻伽聲 哀愍衆生者 我等今敬禮 世尊甚

希有 久遠乃一現 一百八十劫 空過無有佛 三惡道充滿

諸天衆減少（後略）（九卷／二三頁下段）

これは俗に言う梵天勸請の場面で、大通智勝如来のもとへ、十方の大梵天たちが次々に訪れ、転法輪（仏の教え）を請うて唱えた偈である。

その冒頭に記された大通智勝如来への呼びかけが、「聖主天中王 迦陵頻伽聲 哀愍衆生者 我等今敬禮」という、『山水』が引用した一節だ。それではなぜ化城喩品の記述が注目されたのかというと、その答えは偈の続きにある。化城喩品の「從冥入於冥 永不聞佛名」（九卷／二二頁下段）という言はよく知られているが、仏が不在のまま「二百八十劫」という途方もない時間が空しく過ぎ、三惡道（地獄道・餓鬼道・畜生道）が充滿し、天衆までも減少する世界に現れたのが、大通智勝如来だった。閉塞した無仏の世に現れ、迦陵頻伽の声で仏法を説き人々を救い導いた大通智勝如来に、末法が近づく濁世へ生じた光源氏の姿を重ね見たからこそ、当該箇所の典拠として「化城喩品」の記述が古注釈に引用されたのであろう。

私見としては、上記の考察を踏まえずして、先学諸氏が着目した「此

鳥ノ声雖無ト可比之物ニ 仏ノ音声ニハ不及也」「仏ノ滅度ノ後如来ノ御声聞タル人ハアルマシキかやうニコソト思ヤル計源氏ノ音声ノ勝レタルト云也」という『山水』の付した注の意味を解することはできない。この二つの記述は、『山水』の前後に成立した他の古注釈には無い、実枝独自の注である。金子氏は、迦陵頻伽の声が仏の音声に劣るといふ『山水』の言について、『正法念処經』を実枝が誤読した可能性を挙げているが、これは末法思想を説いた大乘經典の一つである、『蓮華面經』巻下の言説に即した記述と考えられる²⁴。

爾時大夜又將名般脂迦。與百萬億夜又衆等。同時舉聲悲泣雨淚以手攬淚。而說偈言

佛聲殊勝踰梵天 出過迦陵頻伽聲 如來不久當涅槃 不復更聞

甘露法（二二卷／一〇七四頁下段）

ここに挙げたのは、釈迦が涅槃を迎えることを悲しみ、大夜又の般脂迦と百万億の夜又衆が涙をぬぐいながら、釈迦に偈を奏上した場面だ。「釈迦如来の妙なる声は梵天を超え、迦陵頻伽の声をまなお超える。如来がまもなく涅槃すれば、再び甘露の法を聞くことは叶わない」という内容で、この後には釈迦がこの世を去る無常を悲しんだ、他の夜又衆や天衆、神々の偈が続いている。その嘆きを受けて釈迦が阿難に語ったのは、自身の涅槃後に待ち受ける、仏法が悪人蓮華面により破壊され尽くす未来と、その荒廢を経て弥勒如来が現れるという予言であった。

阿難。我今語汝。未來之世諸衆生等。壽命八萬四千歲時。彌勒如來應供正遍知。三十二相八十種好。身紫金色圓光一尋。其聲猶如大梵

天鼓迦陵伽音。（二二卷／一〇七七頁上段）

未来世において衆生の寿命が八万四千歳の時、応供²⁵ 正遍知²⁶ にして三十二相八十種好を備えた弥勒如来が現れ、身から出た光明で一面を照らし、その声は大梵天や天鼓の音、迦陵頻伽の音声のようだと云うのである。

『山下水』は「仏の御迦陵頻伽の声」について、迦陵頻伽の声は仏に及ばないとしながらも、大通智勝如来の声を「迦陵頻伽聲」と表した化城喩品の一節を「此所二能叶ヘリ」とし、釈迦が入滅してから聞いた者のいるはずがない、未知なる如来の声を想起するほど源氏の声が勝れているという意味だと、一見難解な注を付している。しかしここまでの考察を踏まえれば、『山下水』が仏典を誤読していないことは明らかだ。すなわち、仏法が潰えた濁世に現れ、迦陵頻伽の声でもって衆生を導く仏の姿に源氏を重ねたうえで、特に釈迦入滅後の末法の世に現れるという、未来仏（弥勒如来）の迦陵頻伽の音声を思わせる美声だという点に、『山下水』の主眼は置かれているのである。

四、仏典における「迦陵頻伽の声」について

さて、上記を勘案するに、『山下水』の注を論拠として、「仏の御」で文章を区切り、「迦陵頻伽の声」と分けて解すべきだとした先学の見解にはやはり従い難い。そもそも仏教文献において、「迦陵頻伽声」とは仏菩薩の梵音声を示す定型表現の一つであった。それは時に仏の相好（三十二相八十種好）の一角を為し、一万三千に及ぶ仏の名号を記した『仏名経』巻一二にも、「南無迦陵頻伽聲仏」（四巻／一八一頁上段）と、「迦陵頻伽聲」の妙相を名に持つ仏が記されている。しかし霊鳥の「迦陵頻

伽」や、舞楽「迦陵頻」に対する論考が数多あるなか、「迦陵頻伽の声」を中心的に論じた論は、管見の限りでは見当たらない。もちろん仏典を踏まえて「迦陵頻伽の声」に言及した論考もあるが、「美声の象徴としての用例²⁷」や、「迦陵頻伽のごとき仏の声、という形容によって、逆に迦陵頻伽の比類ない美声が証明されている²⁸」と、あくまで「迦陵頻伽」の美声に仏の声を准えた、抽象的な比喩表現の一つとして理解されてきた。

ここで参考までに述べておくと、「迦陵頻伽」とは仏教文献において美声で知られる霊鳥である。浄土変相図などでは、人面鳥身で楽器を手に音楽を奏する姿や、楽人と同じ空間で舞楽を舞う姿で表されており、浄土のイメージを視覚化する際に欠かせない存在でもあった。その在所は、『阿弥陀経』では極楽浄土、『大方広仏華嚴経』巻三六では雪山²⁹（ヒマラヤ山脈）、『方广大莊嚴経』巻五第一三では弥勒浄土（兜率天宮）の池、『仏本行集経』巻四九第五〇では羅刹国の樹林と語られており、極楽浄土に限らず、仏教世界のさまざまな場所に住んでいる。

本稿に関わる箇所では、金子英和氏³⁰が「経典ではしばしば仏の声を迦陵頻伽のように美しいとされる」と述べ、例として『往生要集』巻上・大文第二「欣求浄土」に見える、阿弥陀如来の姿（相好）を説明した箇所を引用している。

樹下有座。莊嚴無量。座上有佛。相好無邊。烏瑟高顯。晴天翠濃。白毫右旋。秋月光滿。青蓮之眼。丹果之脣。迦陵頻之聲。師子相之胸。仙鹿王之腦。千福輪之趺。如是八萬四千相好。（八四卷／四五頁上段）

『往生要集』は經典ではないが、日本浄土教の基礎を確立し、文学作品にも大きな影響を及ぼした仏書であり、その意味において右の記述は見逃ごせない。ただし、金子氏はあくまで仏の美声を示す象徴的な比喻表現として『往生要集』の記述を解しており、「迦陵頻伽の声」が仏教においてどのような意味合いを有していたかについては等閑視されている。

重要なのは、仏教文献で「迦陵頻伽声」と表された場合、その大半が迦陵頻伽の鳴き声ではなく仏菩薩の音声を指しており、「迦陵頻伽声」を有すること自体が、仏菩薩の証左でもあったということだ。金子氏が指摘した『往生要集』の記述もまた、阿弥陀如来の相好を列挙した箇所を用いられている。古来より仏教文献では、仏に備わるという三十二種の身体的特徴である三十二相と、三十二相の身体的特徴を細分化し、八十種の吉相を挙げた八十種好が説かれてきた。元々はインドの理想的な帝王に備わる身体的特徴を、仏菩薩の吉相として転用した思想で、この相好を有する者は、在家のままであれば転輪聖王に、出家した場合に正覚を成就して仏になるとされた。三十二相八十種好の内容や順番は經典によって異同があるものの、「迦陵頻伽声」は仏の梵音声にまつわる瑞相としてしばしば語られている。やや珍しい例として、『央掘魔羅經』巻一に見える、央掘魔羅が釈迦に呼びかけた偈を引いておこう。

住住大沙門 白淨王太子 我是央掘魔 今當稅一指
(中略)

住住大沙門 迦陵頻伽聲 我是央掘魔 今當稅一指
住住大沙門 僑吉羅妙音 我是央掘魔 今當稅一指

(二卷／五一二頁下段～五二三頁中段)

右は讒言によって師匠の怒りを買ひ、千人殺害して切り落とした指を首飾りにするよう命じられた央掘魔羅が、千人目の犠牲者として実母の代わりに釈迦を殺そうとした場面だ。「住」とは止まれの意で、「大沙門」とは釈迦を指す。「今當稅一指」とは、央掘魔羅に一指を納めよという意味だ。この『央掘魔羅經』の偈には、釈迦の相好が列挙されており、「迦陵頻伽声」と、同じく鳥の仲間である僑吉羅³¹の妙音が釈迦の梵声を示す妙相として対句的に挙げられている。

『源氏物語』への影響が指摘されてきた『過去現在因果經』巻一にも、仏が具有する三十二相の第二十八として、「二十八者梵音深遠如迦陵頻伽声」(三卷／六二七頁中段)とある。同様の記述は、『釈迦譜』巻一の「二十八者梵音深遠。如迦陵頻伽声」(五〇卷／一八頁中段)という箇所にも見える。さらに付法藏³²の最後の伝灯者・師子の述注とされる『折疑論』巻一は、「八十種随形好(中略)迦陵頻伽声」(五二卷／七九六頁中段)と、釈迦の八十種好を列挙した中に、「迦陵頻伽声」を挙げている。

これらはいずれも、仏伝の始まりを告げる阿私陀仙人の予言の一部である。その内容は、釈迦の父淨飯王が、生まれたばかりの悉達太子(釈迦)の将来を阿私陀仙人に占わせたところ、仏の特徴である三十二相を遍く具有しているため、将来は成道し仏になると告げられたというものだ。こうした占相のモチーフは、『源氏物語』桐壺巻における、幼い光源氏に与えられた高麗相人の予言とも響き合っている³³。「迦陵頻伽声」を有していることは、その者が仏の資質を備えていることを証し立てる

要素でもあったのである。この類の記述は他にも見え、初期大乘經典の一つ『如來不思議秘密大乘經』卷七では、如來の言葉には六十四種の優れた相があるとし、三十七番目に「迦陵頻伽聲」を数えている。

如來語言具有六十四種殊妙之相。何等名爲六十四種。一者流澤。二者柔軟。三者悅意。(中略)三十五者如龍王聲。三十六者如緊那羅妙歌聲。三十七者如迦陵頻伽聲。三十八者如梵王聲。三十九者如共命鳥聲。(二卷／七一九頁下段)

紅葉賀卷で光源氏が発した「仏の御迦陵頻伽の声」もまた、こうした如來(仏菩薩)の音声に重ねた表現と考えられる。しかし右の『如來不思議秘密大乘經』や、前述の『央掘魔羅經』の一節からも明らかかなように、その音声は「迦陵頻伽声」以外にも様々な妙音に準えられている。なぜ『源氏物語』では、「仏の御龍王の声」や「仏の御共命鳥の声」などと記さず、あえて「仏の御迦陵頻伽の声」としたのであるうか。

この点に関して高橋亨氏³⁴は、『古今著聞集』卷六・第二五一に見える、「正教に、筆筆は迦陵頻の声を學といへる事あり³⁵」という記述に着目し、「紅葉賀の試案で歌った光源氏の声は、筆筆のように高く哀調をおびていたのかもしれない」と述べている。迦陵頻伽の声音にまで言及した貴重な指摘だが、本稿では仏が発する「迦陵頻伽声」の性質について述べた仏教文献に目を向けた。まず初期瑜伽行唯識学派による大乘仏教の概論書『大乘莊嚴經論』卷六は、如來の声について説明した箇所、「迦陵頻伽聲」について次のように記している。

釋曰。如來有六十種不可思議音聲。(中略)龍聲者。令信受故。緊那羅聲者。歌音美故。迦陵頻伽聲者。韻清亮故。梵聲者。出遠去故。

命鳥聲者。初得吉祥一切事成故。(三二卷／六一九頁中段／下段)

右によれば、如來の音声を迦陵頻伽の声に譬えるのは、その響きが「清亮」、つまり清らかではつきりとしているためだという。また、『法華經』を法相宗唯識学派の立場から解釈した『妙法蓮華經玄贊』卷第七末は、化城喻品の梵天勸請で唱えられた偈について、「迦陵頻伽妙音鳥也。以聲柔軟清亮哀雅」故以爲_レ喻(三四卷／七九二頁下段)と述べている。概して言えば、迦陵頻伽の声が柔和かつ清らかで明瞭としており、深い情緒を湛えて優雅に響き渡ることから、仏の音声に譬えられたということだ。管見の限りでは、こうした「迦陵頻伽の声」に対する認識は、原始仏典にまで遡る。注目したいのは、『長阿含經』卷一に見える次の記述だ。

菩薩生時。其聲清徹柔軟和雅。如_二迦陵頻伽鳥聲_一。於是頌曰
猶如_下雪山鳥 飲_二華汁_一而鳴_上 其彼二足尊 聲清徹亦然

(二卷／六頁上段)

右は、釈迦が過去七仏の一人である毘婆尸菩薩の誕生を語り唱えた頌である。それによれば菩薩(毘婆尸菩薩)の声は、「清徹」「柔軟」「和雅」であり、「迦陵頻伽鳥聲」の如きものだという。続く頌では、「雪山」(ヒマラヤ山脈)に住む雪山鳥(迦陵頻伽)が華の汁を飲んで鳴くが如く、二足尊³⁶(毘婆尸菩薩)の声が清徹であるのもまた然りと綴られている。紅葉賀卷において、源氏の詠の声が「仏の御迦陵頻伽の声」と表されたのは、こうした經典や仏書に語られる、清らかで柔和、それでいて得も言われぬ深妙な優美さを備えた、仏菩薩の「迦陵頻伽声」の特質ゆえと考えられる。

五、紅葉賀巻における「仏の御迦陵頻伽の声」の位相

そのうえで問いたいのが、「迦陵頻伽声」をめぐる、光源氏と仏伝の位相差だ。華麗極まる試楽の場で、「仏の御迦陵頻伽の声」でもって詠じる光源氏の姿は、あたかも仏菩薩が現出したように聴衆の眼に映ったであろう。その感興が著しかったことは、紅葉賀巻の次の文からも窺える。

詠などしたまへるは、これや仏の御迦陵頻伽の声ならむと聞こゆ。

おもしろくあはれなるに、帝涙をのごひたまひ、上達部親王たちも

みな泣きたまひぬ。詠はてて袖うちなほしたまへるに、待ちとりた

る楽のにぎははしきに、顔の色あひまさりて、常よりも光ると見え

たまふ。(紅葉賀巻／三一―～三二―頁)

右の場面では、「仏の御迦陵頻伽の声」と評された源氏の詠を耳にし、帝から上達部、親王に至るまで皆感涙したとある。興味深いのは、その詠が果てた後、「顔の色あひまさりて、常よりも光ると見えたまふ」という、光明に包まれた源氏の姿が語られていることだ。仏が身にまとう光もまた、三十二相の一つ（第十五丈光相³⁷）である。第三章で取り上げた『蓮華面経』でも、「弥勒如来應供正遍知。三十二相八十種好。身紫金色圓光一尋。其聲猶如大梵天鼓迦陵伽音。」（二卷／一〇七七頁上段）と、未来世で現れた弥勒如来が三十二相八十種好を具有していることに触れたうえで、示現した弥勒如来が放つ「光」と「声」に殊更言及していた。紅葉賀巻の試楽も同様に、仏菩薩が具有する相好のうち二つが光源氏に対して用いられ、末法の世に突如現れ、光明と梵音声でもつ

て衆生を導く、仏の如き超越性が示されているのである。

しかしこの光源氏を渴仰するかのような礼賛を、そのままの意味で受け取ることはできない。既に多くの先学が論じているところだが、仏伝の占相で三十二相を備えた者に示される二つの未来、すなわち在家のまま帝王（転輪聖王）となるか、出家して仏となるかという二択は、光源氏には与えられなかった。仏伝と『源氏物語』の文脈を比較検討した荒木浩氏³⁸は、「仏伝を反転させて生まれた」物語として『源氏物語』を位置づけ、予言を背負い道心を抱きながらも、釈迦のようにには生きられない光源氏の数奇な運命を読み取っている。

また桑野敬仁氏³⁹は、文化人類学でいう「成長（イニシエーション）」の概念が、仏伝を通すことで物語構想の軸として獲得されたとし、源氏の声が「迦陵頻伽鳥の美しい鳴き声に喩えられる時」、当時の読者は『過去現在因果経』で「梵音深遠如迦陵頻伽聲」と評される悉達太子（釈迦）が辿った運命を思い起こし、「光源氏の現在の異様な栄耀に微かな影を垣間見たであろう」と述べた。悉達太子が俗世の苦患を目の当たりにすることで出家を決意した逸話が、源氏の出家にまつわる憂愁の思いと響き合っていることは、『過去現在因果経』に見える釈尊伝と光源氏の出家との関わりについて言及した日向一雅氏⁴⁰の論考でも指摘されている。

もともと紅葉賀巻の時点では、出家成道に関わる憂愁の思いは、まだ光源氏の心に兆していない。それに代わって物語に影を落とすのが、源氏が身に纏う「光」が語られた直後に続く以下の記述だ。

春宮の女御、かくめでたきにつけても、ただならず思して、「神な

ど空にめでつべき容貌かな。うたてゆゆし」とのたまふを、若き女房などは心憂しと耳とどめけり。藤壺は、おほけなき心のなからましかば、ましてめでたく見えましと思すに、夢の心地なむしたまひける。(紅葉賀卷／三二二頁)

源氏が示した仏菩薩の如き神秘的な美質は、弘徽殿女御の「神など空にめでつべき容貌かな。うたてゆゆし」という言によつて、神に魅入られた者が異界に連れ去られる、不吉な暗示として転換する。それと同時に、弘徽殿女御の否定的な媒介を経ることで、源氏の聖性は衆生を救う仏菩薩のものから、彼岸と此岸の狭間にたゆたう、「人間」としての主人公像の中へと据え直されるのである。

さらに物語は弘徽殿女御の言に続き、光源氏の舞を見つめながら懊悩する藤壺へと筆を移している。源氏から寄せられる恋慕に苦しむ藤壺にとつて、この試楽の場はまるで終わらぬ夢の中を彷徨うかのようなであった。「仏の御迦陵頻伽の声」で周囲を感涙させた源氏だが、その先に現れたのは、天帝を余所に恋情に逸り、継母藤壺との容認されざる関係に身を投じる凡夫の姿である。紅葉賀の試楽を終えた源氏は、その翌朝、藤壺のもとに次のような文を送り、その舞に込めた心中を訴えた。

つとめて中将の君、「いかに御覧じけむ。世に知らぬ乱り心地ながらこそ。

もの思ふに立ち舞ふべくもあらぬ身の袖うちふりし心知りきやあなかしこ」とある御返り、目もあやなりし御さま容貌に、見たまひ忍ばれずやありけむ、

藤壺 「から人の袖ふることは遠けれど立ちあひにつけてあはれと

は見き

おほかたには」とあるを、限りなうめづらしう、かやうの方さへたどたどしからず、他の朝廷まで思ほしやれる、御后言葉のかねても、とほほ笑まれて、持経のやうにひきひろげて見あたまへり。(紅葉賀卷／三一三―三一四頁)

源氏は文の中で、先日の舞は藤壺のために心を奮い起して舞ったのだと歌い、藤壺への慕情を切々と述べている。不義の子を身籠った藤壺が抱く、煩悶や葛藤に源氏が思いを馳せることは遂に無く、ただその返歌を持経の如く広げて眺めるばかりだ。試楽の場で仏菩薩の如く讃歎されることにより、かえつてその後には語られる、熱情に浮かされるままに行動する若き源氏の未熟さと、二人の間に横たわる溝が浮き彫りとなるのである。

こうしてみると、光源氏の前半生を彩る、「仏の御迦陵頻伽の声」という表現は、この後暗雲を増していく源氏の宿業を語るうえで、どこか皮肉な響きを帯びてくる。初期大乘経典の一つである『大宝積経』巻一〇六「阿闍世王子會第三七」には、如何にすれば迦陵頻伽の声を得ることができるとかについて、釈迦と師子王子(阿闍世王の子)との間で交わされた問答が見える。

王子又問

云何得梵音 迦陵頻伽聲 云何令世間 見者皆歡喜

世尊答曰

誠言獲梵音 迦陵由軟語 離綺言兩舌 見者皆歡喜

(一一卷／五九三頁中段)

師子王子が、どうすれば「梵音」「迦陵頻伽声」を得て、見る者を歓喜させることができるのか、と問うたところ、釈迦は「誠言」（真心や真実のこもった言葉）ならば梵音を得るとし、「迦陵」とは「軟語」（穏やかな言葉）の意で、「綺言兩舌⁴¹」の十悪を離れば、見る者は歓喜するだろうと答えた⁴²。

紅葉賀巻で光源氏が発した「仏の御迦陵頻伽の声」は、たしかに真心のこもった嘘偽りのない響きを帯び、帝をはじめとした聴衆を感涙させたであろう。しかし、前述の藤壺に渡した文の内容からも明らかのように、源氏が「仏の御迦陵頻伽の声」を発した時、その心を占めていたのは、仏伝のように救いを求める衆生の存在ではなく、藤壺ただ一人であった。ここからも、愛執に囚われ不義の念を抱き続ける、仏菩薩とはかけ離れた源氏の姿が露わになる。

そして藤壺自身から見ても、源氏が自らを救い導く仏菩薩たり得ないことは明らかだ。試楽の場に目を戻すと、藤壺も「おほけなき心のなからましかば、ましてめでたく見えましと思すに、夢の心地なむしたまひける」（紅葉賀巻／三一二頁）と、さすがに源氏の舞に心を動かされてはいるものの、そこには「おほけなき心のなからましかば」という複雑な心情が入り混じっている。不義の子冷泉を懐妊し、出産を控えた藤壺にとって、未だに源氏から寄せられる恋慕も、源氏に対して揺れ動く自身の思いも、等しく破滅の予感と結びつくものであった。藤壺を思い源氏が発した「仏の御迦陵頻伽の声」は、その聖性によって、かえって源氏と藤壺の二人が犯した、救済され得ぬ罪を照らし出すのである。

六、おわりに

以上、紅葉賀巻における「仏の御迦陵頻伽の声」について、仏教文献の記述と照らし合わせつつ考察した。「迦陵頻伽声」は、仏菩薩が具有する相好の一つであり、その清徹な響きは仏伝にも語られている。しかし紅葉賀巻の試楽の場で源氏が発した「仏の御迦陵頻伽の声」は、源氏と藤壺が犯した禁忌の恋を浮かび上がらせる契機として描出されており、仏伝とは明らかに位相を異にするものだ。紅葉賀巻は密通により懐妊した藤壺が、後の冷泉帝を出産する重要な巻でもある。試楽の華やかさの影には、光源氏と藤壺の葛藤を含んだ関係性と、出産による罪の露見を案じて懊悩する藤壺の苦衷が潜んでいる。

また、仏伝の始まりを告げる、三十二相を具有する者に示される二つの未来は、父から王位を継いで転輪聖王となるか、出家成道して仏となるかという輝かしいものであった。言うまでもなく、そこには占相の対象者が父王の血を引く王権の正統な後継者だという前提がある。しかし紅葉賀巻では、源氏が発した「仏の御迦陵頻伽の声」を皮切りに、妻と息子が犯した過ちを知らぬまま源氏の舞に感涙する桐壺帝と、罪障意識を抱え源氏との関係性に悩む藤壺、熱情のままに藤壺に思いを告げる源氏という、三者の交わらない思いが語り出されている点に注意したい。「仏の御迦陵頻伽の声」という表現は、やがて訪れる冷泉帝の出生もたらす、王権の揺らぎを暗示する先触れとしても機能しているのである。

*本文の引用は、『源氏物語』は新編日本古典文学全集（小学館）、『山

下水』は『源氏物語山水の研究…研究叢書一八一』（榎本正純編著／和泉書院／一九九六年）、『教訓抄』は続群書類従（ジヤパンナレッツジ参照）、『古今著聞集』は日本古典文学大系（岩波書店）、『阿弥陀経』『法華経』『蓮華面経』『仏名経』『往生要集』『央掘魔羅経』『過去現在因果経』『釈迦譜』『折疑論』『如来不思議秘密大乘経』『大乘莊嚴経論』『妙法蓮華経玄賛』『長阿含経』『大宝積経』は大正新脩大藏経（大正新脩大藏経テキストデータベース参照）に拠った。

【注】

- 1 『源氏物語評釈』第二卷（玉上琢彌／角川書店）、『源氏物語の鑑賞と基礎知識…紅葉賀・花宴』（至文堂）
- 2 『日本古典文学全集』（小学館）、『新編日本古典文学全集』（小学館）
- 3 田口暢之「仏の御迦陵頻伽の声——『源氏物語』紅葉賀巻再読——」（『年報』（鶴見大学源氏物語研究所）第五号／二〇一九年三月）
- 4 岡田貴憲「『源氏物語』紅葉賀巻管見——「仏の御、迦陵頻伽の声」の新説をめぐる——」（『汲古』第七六号／二〇一九年二月）
- 5 今西祐一郎「御迦陵頻伽の声」統紹（『汲古』第七七号／二〇二〇年六月）
- 6 金子英和「『源氏物語』紅葉賀「仏の御迦陵頻伽の声」の解釈——『山水』の仏典引用——」（『汲古』第八〇号／二〇二二年二月）
- 7 例えば『新潮日本古典集成』は「阿弥陀如来の（迦陵頻伽のような）説法の妙音であろうかと。「迦陵頻伽」は極楽にいる美声の鳥で、如来の説法にたとえられる」と解している。その他、『日本古典文学大系』、『新日本古典文学大系』、『日本古典文学全集』、『新編日本古典文学全集』、『源氏物語の鑑賞と基礎知識』、『源氏物語評釈』が、迦陵頻伽とは極楽浄土に住む音声絶妙の鳥であると記す。

- 8 『阿弥陀経』には悟り（菩提）に至るための七科三十七種の修行法である三十七道品のうち、四念住・四正断・四神足を省略した五根・五力・七菩提分・八聖道分の四科が挙げられている。五根とは修行者が自らに定める仏教の根本理念であり、悟りを得て解脱するために必要となる五種（信・精進・念・定・慧）の能力・機根を言う。
- 9 五力とは、修行者を悟りに至らせる五つの力（信力・精進力・念力・定力・慧力）を指す。「五根」を得た修行者は、それにより「五力」を得て諸悪や迷妄を破ることが出来るとされた。
- 10 七菩提分とは七覚支とも言い、悟りを得るための七つの条件（正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定）の徳目で、八正道とも言う。悟りを開いた釈迦が初めて説いた教え（初転法輪）でもあり、四つの真理（四諦）を知り、中道（八正道）を実践すれば、苦を離れ涅槃に至ることが出来るとされた。
- 11 八聖道分とは、悟りを得るための八種の実践行（正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定）の徳目で、八正道とも言う。悟りを開いた釈迦が初めて説いた教え（初転法輪）でもあり、四つの真理（四諦）を知り、中道（八正道）を実践すれば、苦を離れ涅槃に至ることが出来るとされた。
- 12 注3 田口氏前掲論文
- 13 阿部秋生「光源氏論…発心と出家」（『東京大学出版会』一九八九年）
- 14 なお「聖主天中王（天）」は、「聖なる主、天の中の王（天）」という意で、ここでは大通智勝如来を指している。
- 15 注4 岡田氏前掲論文
- 16 なお岡田氏は、『枕草子』第一一六段の「その寺の仏の御経を、いと荒々しく、たふとくうち出でよみたるにぞ」という一文を論拠として挙げて、この寺の本尊に関わる経典を説誦するという意味であり、岡田氏がいふ「優れた製作物」としての用例には当て嵌まらないように思われる。
- 17 注5 今西氏前掲論文
- 18 注5 今西氏前掲論文
- 19 注6 金子氏前掲論文
- 20 管見の限りでは『河海抄』以降、『万水一露』『紹巴抄』『山水』『孟津抄』

『岷江入楚』が化城喻品を引いている。なお本稿では、上記以外に『源氏釈』・『奥入』・『紫明抄』・『花鳥余情』・『弄花抄』・『細流抄』・『明星抄』の注を合わせて参照した。

21 なお「山下水」以前に記された三条西家の注釈書として、三条西実隆の『弄花抄』・『細流抄』、公条著の『明星抄』が挙げられる。しかし『弄花抄』・『細流抄』には「仏の御迦陵頻伽の声」に関する注自体が無い。

22 「苦空無我」とは、「苦（一切皆苦）・空（一切皆空）・無常（諸行無常）・無我（諸法無我）」という、四諦の一つである苦諦の四行相を指す。原始仏典では、凡夫はこの世の真理（四諦）を見通せず「常楽我淨」と錯覚する（四顛倒）という意味であったが、『涅槃經』では「無常・苦・無我・不淨」の自覚を経ることで悟りの境地に至ると解し、「常楽我淨」こそ涅槃の境界であり、如来が有する四徳だと説いた（四徳涅槃）。

23 金子英和氏（注6前掲論文）もまた、当該箇所を典拠について、「阿弥陀經」などの影響か」と指摘している。

24 なお「金光明最勝王經」卷一〇「十方菩薩讚歎品第二七」にも、十方から来集した菩薩が釈迦を礼拝し、釈迦の声は「迦陵頻伽等」の声にも超勝ると讚歎した記述が見える。

三十二相遍莊嚴 八十種好皆圓備 光明晒著無與等 離垢猶如淨滿月 其聲清徹甚微妙 如師子吼震雷音 八種微妙應群機 超勝迦陵頻伽等（『大正新脩大藏經』一六卷／四五四頁下段）

25 仏の尊称である十号（如来・応供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・仏世尊）の一つで、世の尊敬と供養を受けるに足る者の意。

26 仏の十号の一つで、遍く正しい智慧と悟りを得た者の意。

27 『源氏物語の鑑賞と基礎知識』紅葉賀・花宴「迦陵頻伽・龍頭鷲首」（三〇〇頁／至文堂）

28 佐藤道子「供養会と舞楽「迦陵頻伽」（『古代文化』第五二卷一／二〇〇一年一月）

29 大雪山とも言う。漢訳仏典では、インド北部のヒマラヤ山脈を「雪山」

と表記した。『涅槃經』聖行品には、釈迦の前世である雪山童子が雪山で修行していたおり、羅刹から偈を聞くために一命を賭したという物語が記されている（施身聞偈）。

30 注6金子氏前掲論文

31 梵語コーキラを音写した表現で、拘者羅・拘积羅・俱伎羅・俱翅羅とも言う。好声鳥とも漢訳され、鳴き声の美しい鳥の名として仏典などに記されている。

32 釈迦入滅後、正法の時代に千年に渡りその教法（法蔵）を相伝・布教していった二十四人の正師のこと。

33 この点については今井源衛氏の『源氏物語の研究』一「源氏物語概説」未來社／一九六二年）や、高木宗監氏の『源氏物語と仏教』第十章「仏教文学として観た『源氏物語』の種々相」（桜楓社／一九九一年）に同様の指摘がある。

34 高橋亨「迦陵頻伽」（『国文学』解釈と教材の研究』第三九卷一／学灯社／一九九四年十月）

35 『古今著聞集』卷六・第二二「志賀僧正用枝の筆策を聴き初めて感涙の事」

36 仏の尊称の一つで、両足尊・両足中尊とも言う。二本の足で歩く者の中で最も尊い方といった意である。

37 常光一尋相、身光一丈相などともいう。仏の身は四方に一丈の光を放ち、三千世界を照らすとされた。

38 荒木浩「非在」する仏伝——光源氏物語の構造」（『かくして『源氏物語』が誕生する…物語が流動する現場にどう立ち会おうか』／笠間書院／二〇一四年）

39 桑野敬仁「前源氏物語から源氏物語へ——作品的統一性と作家的同一性」（『比較文化研究』第一五輯／一九七七年三月）

40 日向一雅「幻巻の光源氏とその出家——仏伝を媒介として」（『源氏物語へ源氏物語から』／笠間書院／二〇〇七年）、同「光源氏の出家と『過去現在因果経』（『源氏物語』東アジア文化の受容から創造へ）／笠間書院／二〇一二年）

41 「綺言」は虚飾の言葉、「両舌」は二枚舌で伸を引き裂くことを指し、それぞれ十悪の一つに数えられる。

42 なお『無上依経』卷下「如来功德品第四」にも、「若菩薩恒説實語愛語美語。敷演正法不使顛倒。以此業縁得梵音聲如迦陵頻伽。妙響深遠如天鼓振。」（『大正新脩大藏経』一六卷／四七四頁中段）と、真実に叶う言葉と行動で、優しさをもって人々を救いに導く業縁により、菩薩は迦陵頻伽の如き梵音を得ると説かれている。